

28

京都帝国大学医科大学の医化学講座初代教授 荒木寅三郎とその一門について

中澤 淳

山口大学

東京の帝国大学に対する第2の存在として京都帝国大学が発足したのは明治30(1897)年であった。当初の理工科大学に加えて医科大学が、解剖学、生理学、医化学、衛生学各1講座および内科学、外科学各2講座の計8講座をもって開設されたのは2年後の明治32(1899)年9月のことであった。その医化学講座の担当教授に任命されたのが、岡山の第三高等学校医学部生理学・衛生学教授を務めていた荒木寅三郎である。荒木は、帝国大学医科大学別課の卒業生であり、当時のドイツ領ストラスブルグ大学の生理化学の権威Felix Hoppe-Seyler教授のもとで6年半研修を積み、帰国後岡山において3年7ヶ月間生化学の教育と研究に従事していた。この間に荒木は医学博士の学位を取得したが、これは医学士でない別課卒業生としては異例のことであった。当時、新設の医科大学で医化学を担当できるのは荒木以外にはなく、したがって33歳の若さでの抜擢となった。医化学教室には荒木の名声を慕って全国各地から人が集まり、卒業生や臨床各科やからもその門をたたく者が絶えなかった。荒木は明治36(1903)年から医科大学長をつとめたが、その行政的手腕が評価されたためか、大正4(1915)年には京都帝大で初めての公選による総長に選ばれ、昭和4(1929)年まで14年間総長を務めた。総長就任後も、後任の前田 鼎教授の着任(大正8(1919)年11月)まで、都合20年にわたり80名を超える教室員に対し研究を指導した。

医化学教室では、荒木のストラスブルグでの学位論文に関連して、酸素欠乏時における動物体内乳酸生成の研究が行われた。生成した乳酸の立体構造を決定し、筋肉の無細胞抽出液により乳酸生成が酵素作用であることを証明している。また、荒木は明治35(1902)~36(1903)年の欧州出張の際、ハイデルベルグのAlbrecht Kosselのもとで、腸粘膜にDNA分解酵素DNaseが存在することを発見した。医化学教室では、さらに各種生物や組織から分離した核酸の化学分析および核酸分解酵素の研究、鶏卵の孵化時における物質代謝の研究なども行われた。荒木が指導した研究の成果は70編を超えるドイツ語論文として発表されたが、そのうち45編はHoppe-Seyler's Zeitschrift für Physiologische Chemieに掲載されている。これは、荒木の恩師とのつながりからみて当然とも思われるが、研究の質の高さがこれを可能にしたと考えてよい。

荒木一門からは、古武弥四郎(大阪帝大)、井上嘉都治(東北帝大)等の医科生化学教授の外、戸田正三(京都帝大医・衛生学、後に金沢大学々長)、佐武安太郎(東北帝大医・生理学)、佐伯 矩(国立栄養研究所々長)等の他分野の教授等も出ている。また、勝山虎三郎(台湾総督府医学校教授)、戸谷銀三郎(大連病院々長、名古屋市大学長)、守中 清(大連病院々長、満州医大学長)、佐藤剛蔵(京城帝大医・医化学教授、京城医専校長)などは、旧植民地における医学教育・医療に貢献した。日露戦争から第一次世界大戦の終わりまでのわが国学術の勃興期に、医学の中でも基礎的な分野である生化学の研究・教育において、日本の指導的立場に立つ研究グループを形作ったのが荒木寅三郎であった。

荒木の医化学教室は、その後前田 鼎、内野仙治と2人の教授が引き継ぎ、第4代早石 修教授の時代(昭和33(1958)年~昭和58(1983)年)にさらに大きな発展を遂げた。早石はアミノ酸代謝の研究から酸素添加酸素を発見し、その働きにより生成する生体活性物質の研究を展開した。早石門下からは、早石修(大阪バイオサイエンス研究所理事長)自身に加えて、西塚泰美(神戸大学医教授、同学長)、本庶佑(京都大学医教授、静岡県公立大学法人理事長)、中西重忠(京都大学医教授、大阪バイオサイエンス研究所々長)と4名の文化勲章受章者を輩出した。このように荒木寅三郎の医化学教室の学灯は連綿として受け継がれて、なお一層の輝きを放っている。